

水上瀧太郎全集

十

水上瀧太郎全集 十卷

精興社印刷 板倉製本

昭和十六年五月五日印刷  
昭和十六年五月十日發行

水上瀧太郎全集 十卷

著者 阿部章藏

發行者 岩波茂雄  
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者 白井赫太郎  
東京市神田區錦町三丁目十一番地

發行所 岩波書店

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

# 目次

久米秀治氏	一
「鏡花全集」の記	一六
いましめ	四一
噂の迷惑	五二
取消	六三
小説家小島政二郎氏	六九
「三田文學」の復活	七三
島崎藤村先生のこと	九三
無題	一一五

「古溪隨筆」讀後感	．．．．．	一一七
讀後所感	．．．．．	一二七
紅蓮洞	．．．．．	一二九
「愛慾」を見て	．．．．．	一四九
「デリケート時代」を讀みて	．．．．．	一五一
山を想ふ	．．．．．	一五三
藤原誠一氏紹介	．．．．．	一六九
小島政二郎氏の第二小説集	．．．．．	一七一
新聞嫌	．．．．．	一七六
「ブルドッグ」の序	．．．．．	一七九
芥川龍之介氏の死	．．．．．	一八六
手帖の落書	．．．．．	二〇〇

押の一手	二〇二
感謝	二一三
對話	二二三
無題 二	二三五
「多情佛心」を評す	二四〇
應援歌	二五七
無題 三	二六二
「緑の騎士」とその作者	二六三
原稿紙	二八一
芝居の「すみだ川」	二九〇
「嫉妬」寸評	三〇七
「嫉妬」私見	三〇八

原稿拜見	三一九
三宅周太郎氏の世界	三三〇
信仰の作者	三四五
白水郎句集	三四九
築地小劇場をたたふ	三五一
「たのむ」と「大寺學校」	三六三
鏡花世界瞥見	三七九
小山内先生終焉の夜	四一五
小山内先生のことども	四二二
通勤のみち	四三一
「春泥」雜感	四四五
小山内家後事	四六七

島崎藤村先生の足跡	四七五
早慶野球決勝戦の日	四九七
小山内先生の戯曲	五一一
「一つの時代」と「南京六月祭」	五一九
倉島竹二郎氏の人と作品	五四四
今年の夏・鯉・金魚	五五五
素人の小説	五六四
休暇・典型的勤人・人造人間	五八六
天覽野球試合陪観之記	五九三
三田新聞記者の態度を難す	六〇五
帝劇嗟嘆	六一〇
我が飲屋	六二四



大江賢次氏の印象	六二九
父の「米國紀行」	六四一
卒業式	六五八
帝都復興祭餘興	六六六
加宮和香子の追悼	六七二
「ベース・ボール」創刊號埋草	六七四
後記	一

## 久米秀治氏

大正十四年一月一日久米秀治氏死去す。病名急性腹膜炎？

久米さんは實にいゝ人だつた。私は久米さんを評するに「いゝ人」といふ以外の適切なる言葉を見出す事が出来ない。

久米さんと私とおつきあひは、明治四十三年に創刊せられた雑誌「三田文學」をくさびとして結ばれた。當時二人とも慶應義塾の學生で、私は理財科、久米さんは文科の哲學專攻だつた。私の方が二級上だつたので、何となく年上の積りでゐたが、久米さん死後その追悼會に列した時、始めて私の方が一つ下だつた事を知つた。

學級が違ふのとは反對に、世間智にかけては久米さんの方が遙かに先輩だつた。此點に於て甚だませて居た久米さんの目には、一本調子の私の如きは、をかしい程お坊ちゃんに見えたやうで

ある。人に對する時、何時も目尻になつかしみのある微笑を浮かべて居た久米さんは、世間はそんなものではありませんよと、口にこそ出さないが、その微笑にものを言はせて居た。

ほんとに久米さんは、學生時代から世馴た人だつた。放縱無頼の學生の間に伍して、その連中に爪弾きされる程豊かな常識を備へて居た。その爲めに同年配の學生などは、全く子供っぽく見えたやうである。勿論私の如きも、大人になり切れない人間として取扱はれて居た。しかし、自分で云つてはをかしいが、私のその大人になり切れないところを、久米さんは決して馬鹿にはして居なかつた。寧ろ多大の興味をもつて眺めるといふ態度だつた。

尤も私にして見れば、自己肯定のいやみはあるが、大人になり切れない心を失ひ度くないと思つて居る。久米さんが考へて居る程私だつてお坊ちやんでは無い。通りいつべんの世間並を學べば學べるであらうが、それを學び度いとは思はないのだ。其處で久米さんの天衣無縫とも稱す可き人當りの圓滿なところや、事毎に穩當な判断を下すところに感服すると同時に、時には餘りに大人過るのを羨しくなく考へる事もあつた。

當時「三田文學」を中心として、藝術創作の熱情に夢中になつて居た學生は澤山あつた。久保田万太郎さんのやうに、處女作「朝顔」を發表すると同時に、忽ち一般に認められて、新進作家の一

人に數へられたのは珍しいので、あとは志は大きいが扱て作品は思ふやうには出来ないとか、或は立派な抱負のあるやうな口はきゝながら、毎日毎日酒びたしになつて居るやうなのだとか、まともで無いのが多かつた。その連中の生活といふものは、うちを出て来る時は袴を穿き本を抱へて来るが、多くは當時文科の教室にあてられて居たヴィツカアス教授の舊宅の二階で、日の暮れる頃迄出鱈目な話をして居るのであつた。それから隊を組んで、其頃ぼつぼつ出来始めたカフェを飲廻るのや、芝浦邊の料理屋で荒つぽい酒盛をするのもあつた。

久米さんは其仲間には加はらなかつた。加はらなかつたと云ふよりも、相手にならなかつたと云ふ方が當つて居るかもしれない。たくみに避けて、一人でさつさと姿を消した。右だか左だかに稍傾いた首を持つ特殊の後姿は、今も私の忘れ難く思ふところである。

金釦ゴウケンの制服を着るのは野暮だと思つて居たものか、大學部の本科の生徒は和服が多かつた。本を懷中に押込み、袴の紐にインキ壺をぶらさげて、懷手をして歩いて居るやうなてあひの中で、久米さんはブラツシのかゝつた制服に、山の高い中折帽子をかぶり、冬になると會社員好みの變色のオバア・コオトを着て來た。時には和服の事もあつたが、羽織も袴もたゞみめがくつきりついで居て、何れにしてもだらしの無い書生さんとは趣を異ことにして居た。その癖學業にかけては、

矢張り怠け者の一人であつた。

同級の久保田さんは別として、久米さんが他の學生と交渉を持つのは、何か催しのある時に限つて居た。親切で世話好だつたし、おまけに素晴しく能書だつたから、先づ揭示を書く事から、會場の世話まで、誰よりも眞面目に着實に取運んだ。ふだんは成る可く仲間になり度くない連中ともいつしよになつて奔走するところは、決して御義理いつぺんの事では無く、全く世話好の性の發露だつた。いざとなると役に立たない悪玉は「久米幹事」といふ少なからぬ輕蔑の意を含ませた言葉で呼んで居た。

學生の書いたものが少しづつでも「三田文學」に出るやうになつたのは、雑誌創刊の翌年からで、井川滋氏の「逢魔時」を眞先に、久保田さんの「朝顔」に續いて私の「山の手の子」松本泰氏の「樹蔭」などが出て、一段とみんなの野心を募らせた。例の文科の學生溜りで、創作の苦心などを語合つて居たものだが、そんな席ではあまり口をきかない久米さんも、その年の十二月號に「灯」といふ小説を發表して、事の意外にみんなを驚かした。創作ばかりが此人生に於て價値のある仕事だと思つて居た位夢中だつたから、「幹事さん」が小説を書いてゐたといふ事は、思ひもつかない事だつたのである。けれども其小説の出來榮は甚だ冴えないもので、矢張り「幹事さん」の仕事であつ

た。

その後「三田文學」と「スバル」に發表した久米さんの小説は、數に於ては相當であるが、どうも眞面目に見ても拙劣なものであつた。一言にして之を評すれば、或事件の報告に止つて、味もそつけないのが缺點である。常識の發達した世間人久米さんの處世の態度で、てきばきと事務を處理するやうに書いたのであらう、商事會社の營業報告か官廳の文書の如き感がある。

世間には無技巧を標榜する作家もあるが、久米さんの小説こそほんとの無技巧だつた。それは意識して凝つた技巧を避けるとか、或は成る可く目につかない書方をしたいとか云ふのでは無く、全く無邪氣なる無技巧で、極端にいへば、技巧を凝らす丈の細かい苦心をしなかつたともいへるし、苦心をするといふ事にさへ考へ及ばなかつたとも云へる。一例として大正三年正月の「三田文學」に出た「烘麥」といふ小説を引合ひに出して見ると、先づ書き出しが、

貞子は五時頃樋口さんと連立つて學校の門を出た。

とあり、以下行の變り目に、その貞子といふ女主人公の名前で始まるのが四拾餘箇所ある。

貞子は豫て樋口さんに頼んで置いた貸間の好いのが見付かつて……

貞子は途々腹の中で、今夜兄に何と云つて家を出る話を切り出したものかと……

貞子は樋口さんと一緒に居る事なんか忘れてしまつて……

といふやうな風で、此の小説の最後の一節の如きは、貞子の次に貞子が續き、更に又貞子と來る著しい特徴のあるものである。

貞子は手紙を讀んでるうちに涙がほろほろこぼれた。以下一行

貞子の頭の中にはいろんな事が走馬燈の如く往來し初めた。以下二行

貞子は今度の事の責任が皆自分にあるやうな氣がした。以下二行

貞子は今は下らぬ悔恨や追想に耽つて居べき時でないと自分の心を勵した。

その外段切でない間々のセンテンスの、貞子に始まるものを數へたら限りが無い。いかにも智慧の無い書方で、斯ういふ無雜作無頓着が久米さんの小説そのものである。

明白にいへば、私は久米さんを藝術家だとは思つた事が無い。何かの氣紛れで文科を志望し、周囲の空氣に動かされて創作の筆を執り始めたので、恰も世間は斯うしたものだといふ久米哲學と同じく、みんなが書くから書いて見たと云ふ程度では無かつたらうか。久米さんが文科出身の、しかも哲學專攻だつたと云ふ事は、多くの人の意外とするところであつた。徹頭徹尾世間智の人であつた久米さん自身は、人々が意外に思ふのを寧ろ興がつて居た位である。

それでも久米さんは、常々小説を書く暇の無い事を嘆じて居た。それは創作慾が内に燃えて居る爲めと云ふよりも、書かないでは義理が悪いと思つて居たものらしい。しかも存外此の不義理を厭ふ心持は強かつたやうである。たとへば永井荷風先生が「三田文學」「文明」「花月」などを主宰しておいでになると、その雑誌に寄稿しないでは申譯が無いとか、或は大正五年に、「三田文學」を吾々若輩の努力で存續させて行かうと約束して以來は、私の顔を見る度に、何も書かないで済まないとか、近いうちに屹度投稿するといふやうな事を口にした。何時もお恥かしいものではあるが、約九年間酬むられざる投書家として、殆ど休みなく書きつゞけて居る私に對して、義理を缺くやうな氣がするらしかつた。さうして、忙しい中で書いた小説を、かなり澤山寄稿した。此の義理堅さは、久米さんの人格を美しくした。

前にもいふ通り、久米さんは決して藝術家としては勝れてゐなかつた。處女作「灯」以後、大正十四年二月の「苦樂」に出てゐる絶筆「めぐりあひ」に至る迄、量に於ては充分あるが、私は一冊の本に纏めて残し度いとは思はない。曾て「文明」に連載した「小菊の執念」と云ふつゞき物は、作者の名を明かに記してあるにも拘らず、或粗忽な本屋が永井先生の作だと思つて、出版し度いと申した。何故これを永井先生の作品だと思つたかといふと、單にその文體が言文一致でないと思ふ



以外には理由を見出し難い。當時永井先生はしきりに文章體の隨筆を書いてゐらつしやつた。元來拮据なる久米さんの文章は、到底世界を明治初年にとつた執念物をこなす事は出来なかつたのだが、本屋にはそれ丈の批判力は無かつたのである。念の爲めに其一節を抜いて見よう。

話は此某の家には何の交渉もなく、四十余年以前に溯り、相模屋と云ふ紙店に起りし事、某は誠にそれより三代目の家主に當るなり。

頃は明治の始め、世は徳川家の治下を離れて、王政復古の御世となり、庶民は三百年の長き夢より醒めて、有難き天津日影を拜する事となりし時の事、江戸は東京と名を改めても、昔に變らぬ大繁昌、相模屋の店も世と共に榮え、軒に掲げし大福帳は、幾世替らぬ家の徴とぞ見えぬ。

本屋の間違は直ぐにわかつた。それでも永井先生の序文を頂いて一冊に纏めるといふ話が相當進んでゐた様子だつたが、どうした事か結局お流れになつてしまつた。戯作風の「小菊の執念」の出版を條件として、眞面目に書いた短篇を集めて別に一冊出させようとした爲め、破談になつたのだと云ふ噂もあつた。

これよりさき、私が久米さんとへだてのない話をするやうになつたのは、明治四十五年に私が